

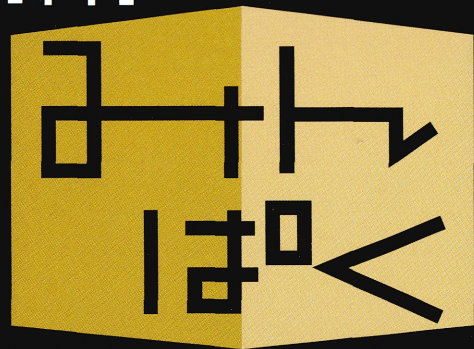
月刊

昭和52年10月5日第1号刊行 ISSN0386-2283
平成19年10月1日発行 第31巻第10号通巻第361号

国立民族学博物館

2007

10



地の先へ。
知の奥へ。
みんぼく
30th
Anniversary

特集

トイレ

日本の基準の一步先へ

紫舟

シユウ／書家。6歳より書をはじめ。おもな作品の提供先は、NHK美術番組「美の壺」題字 掛軸文字一式、朝日新聞で書の連載「いい名」(2004.11~2007.3)、浜崎あゆみミュージックフィルム「月に沈む」題字、「ベネチアビエンナーレ2005企画展」など。常設展示は「フォルクスワーゲン」「アウディ」一部ショールームなど。
http://www.e-sisyu.com

海外で書を披露したり展示したりする機会に恵まれてきた。

イタリア各地での一カ月の展示とベネチアでの国際的な芸術祭を終え日本に帰ってくると、いくつ取材依頼が入っていた。そのため現地で撮った写真を用意しながら、やるせない気分になった。

取材を終えてきあがったどの記事にも、「世界で活躍する：」「海外で絶賛：」「国際的に：」「そんな賞賛が並んでいた。記事の写真には、多くの観衆に囲まれていたり、サインを求める長蛇の列があったり、展示を見に集まった大勢の人びとが写っていた。その賞賛を裏付けるには十分だった。

でも、わたしにはわかっていなかった。実際は通用しなかったことを。彼らは、極東アジアの日本という島国にこんな伝統文化があるんだと、目新しくめずらしく感じただけだということ。

海外二カ国以上で何かをすると、「国際的に：」と言ってもらえる。海外の人たちに囲まれた写真を用意すると、「世界で絶賛：」と言ってもらえる。とてもラッキーだ！

でも違うと思った。
日本の伝統的な書は、日本にこんな文化があるんだということ伝える以上になること、ちゃんと世

界に通用することを伝えていきたい。

知らず知らずのうちに、「これはわたしたちの文化だから」という判断基準をもって、理解するには勉強が必要で美意識が必要で、というのをもひとつだけ、理解してくれるのを待つばかりでは、ずっとそのままだ。

「わたしたちの文化」という日本の基準と、世界に通用する世界基準。そのために、わたしはハリウッド映画の題字を書くことを目指すことにした。

一本の線を切なく書くことができたり激しく書ければ、アルファベットも表現できる。映画の象徴的なシーンを文字に見立てたり、一番伝えたい感情を線に込めたり。「結果として今回のハリウッド映画は日本の書を題字に用いました」ということもありうるだろう。

そうして完成した題字は映画とともに世界配信され、いろんな国の伝統も文化も異なる人びとが見て映画のストーリーや感情など、何か感じてもらうことができれば、そのときこそ、「世界に通用する書」といえると信じている。

文字を表現する手段としての書が、日本の基準をこえ世界基準へ。世界に通用する日本の伝統としての書を目指そうと考えている。



目次
OCTOBER 2007
月刊みんぱく 10

01 エッセイ 世界へ世界から
日本の基準の一步先へ
紫舟

02 特集 トイレ

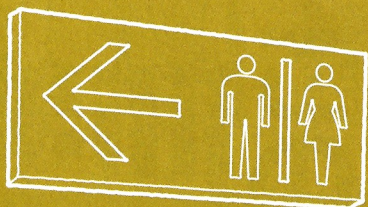
トイレの文化、文化のトイレ
スチュアート・ヘンリ
カズ
廁は何故恐い
常光 徹
エコ・トイレと高層(=高槽)トイレ
—西アフリカでの体験から—
川田 順造

- 03 循環の活用—中国—
横山 廣子
トイレは野天で—インド—
金谷 美和
日本とのトイレつながり—トルコ—
木村 周平
- 08 モノ・グラフ
棒締頭絡
小島 摩文
- 10 地球ミュージアム紀行
ハノイで人気の博物館
榎永 真佐夫
- 11 表紙モノ語り
沈香のかおる香炉
信田 敏宏
- 12 みんぱくインフォメーション
- 14 万国津々浦々
アンデスとアマゾンアの挟間で
木村 秀雄

- 15 時論・新論・理想論
思い出よ、思い出よ、私の思い出よ
佐藤 浩司
- 16 外国人として生きる
僕の幸せ
—ニッさんがタイ料理屋をひらくまで—
岡部 真由実
- 18 地球を集める
予期せぬことがいっぱい
—中国での映像取材—
塚田 誠之
- 20 生きもの博物館
米のある風景
長谷 千代子
- 22 フィールドで考える
狩猟採集社会の老人たち
林 耕次
- 24 開館30周年記念事業のご案内
次号予告・編集後記

トイレ

トイレには国や地域の文化が如実にあらわれる。トイレは人体からの老廃物を処理するだけでなく、それらを資源やエネルギーに変える装置にもなる。この特集では、世界のトイレ文化をばっかりなく語り、人類の将来をじっくり考えてみたい。



断水に備え、トイレ用の水を
用意する(トルコ)



公衆トイレでは、
入り口の男性に金を払って
入場する(トルコ)



メタンガス・トイレ設備の
一角を占める豚小屋(中国)

トイレの文化、 文化のトイレ

スチュアート ヘンリ

放送大学教授

トイレで「文化」を知る

「はばかり」ともいわれてきたトイレは、そのとおり現在、憚られる話題である。きわめてプライベートとされるトイレと排泄について、すすんで語る人は、近代日本をはじめ、自称「文明人」には少ないと思われる。しかし、トイレは「文化」を知ろうと、役に立つ研究分野でもある。それぞれの民族や国民によって異なるトイレや用便のあり方があり、密室化するところもあれば、かなり開放的なところもある。

用足しをするときの羞恥心について、トイレは多くを教えてくれる。お隣の中国では、最近までは仕切りのないトイレが井戸端会議ならぬ便所端会議の場所であった。今は少なくなっているかもしれないが、わたしの若いときの日本男児なら「連れシヨ

ン」もごく普通であった。

一八世紀のイギリスやフランスでは、領主が便器に座って用足しをしながら部下に指示を与えたり、談義に花を咲かせたりするという記録もある。

逆に、アフリカのある民族においては、男性が用を足す行為はあまりにも恥ずかしいことなので、成人式で肛門をふさぐ儀式をおこなうほどであった。アイヌ民族の伝承でも、女性は顔をかくして用足しをし

たと伝えられている。

わたしが自分の「羞恥心」を思い知らされたのは、アメリカのある空港でのトイレ経験である。男便所なので、小用の便器が並んでいる壁の反対側に大用の便器が並んでいた。ところが、便器と便器のあいだに仕切りはあるものの、前の扉がない！ 便意をもよおしていたわたしだったが、便意が急に消えてしまい、そのトイレで用足しをせず後にした。

トイレ文化の画一化

現在の日本のトイレ事情はひと昔前とは大きく変化している。和式の便器が洋式に変わり、「ポットン式」の汲み取りトイレなんぞはほとんど姿を消している。谷崎潤一郎著の『廁(かむや)いろいろ』には、「ほんのりと淡い匂がある。それは臭気止めの薬の匂と、糞尿の匂と、庭の下草や、土や、苔などの匂の混合したものであり、「便所の匂には一種のなつかしい甘い思ひ出が伴ふものであり、「幼時の記憶がよみがへって来て、ほんたうに我が家に戻って来たなあといふ親しみが湧く」と書かれている。トイレの匂いで幼児の記憶がよみがえり、郷愁を感じる人は現在、いるだろうか。

三〇年以上前のことではあるが、アフガニスタンの調査に参加したとき、奥地の宿(オアシカ)の二階に、床に三〇センチメートル四方の穴が開いている半畳ほどの小部屋があった。その穴をまたいで用便するのだが、ブタがその下で天から降ってくる糞尿にあずかろうと、文字通り首を長くして待っていた。

グローバル化が進む昨今、トイレ文化が画一化され、旅先で変わったトイレに遭遇することもあまり期待できなくなってしまう。

ベトナム北部の農村では、屋敷地の中庭に、井戸(手前)、家畜小屋(左奥)、便所(右奥)が置かれ、人畜の糞尿は肥料として利用される



かわや
厠は何故怖い

常光 徹
(つねみつ とおる)

国立歴史民俗博物館教授

恐怖の空間

夕方誰もいない音楽室から流れてくるピアノの音、深夜に動き出す理科室のガイコツ模型、三回ノックをして「花子さーん」と呼びかけると返事が返ってくるという女子トイレ。子どもたちが話題にする学校を舞台にした怪談は多彩だが、それらの多くは校内の特定の空間と結びついて語られる傾向が強い。なかでもトイレには不思議な現象や妖怪話が集中している。

生理的な不安

中学生に人気のある怪談にこんな話がある。夕方、忘れ物を取りに学校にもどった女子生徒が、ぼろぼろの白衣を身につけ髪を振り乱した女(亡霊)に追いかけられる。女子生徒はとっさにトイレのいちばん奥に隠れるが、女は手前から

順にノックをしてドアをあけていく。まもなく、女子生徒のとなりのドアをノックする音がびくびく、何故か最後のドアをたたく音がしない。ほっとして立ち上がった女子生徒が顔を上げると、ドアの上から女の顔がじつと覗き込んでいた。束の間の安堵感のあとに言い知れぬ戦慄(せんりつ)がはしり、恐怖が襲いかかってくるという、よくできたストーリーである。高い位置から見おろされている視線を意識したとき、人は誰しも背中に寒気がはしる。学校のトイレは天井を覆っていない造りがふつうで、まわりから完全に仕切られた個室の空間ではない。しかも、不特定多数の人間が使用する場所だけに、心のどこかに覗かれることへの不安があり、この話はそうした生徒の心理をうまく取り込んでリアリティを生み出している。

それにしても怪談がトイレ空間に多いのは何故だろうか。すぐに思い浮かべたのは、以前の汲み取り式の、薄暗くてくさい便所の雰囲気だが、しかし、妖怪たちは明るくて水洗式の現在のトイレに頻繁に出没している。どうも、トイレの形的な条件というよりも、そこを使用する人の行為と意識のうちに原因がひそんでいると予想される。基本的には、

人の気配を感じるようで
感じない静けさ…。
どこか異界とつながっているような
雰囲気がある



特集 トイレ

エコ・トイレと 高層(=高槽)トイレ —西アフリカでの体験から—

川田 順造
(かわだ じゅんぞう)

神奈川大学
日本常民文化研究所客員研究員

エコシステムで循環

トイレの思い出を西アフリカについてたどってみると、ふたつの、対極に位置付けられるかもしれない事例が思い浮かぶ。それぞれかなり広範囲に見られる。ひとつは、排泄行為も含めたヒトの営みが、生物界の循環系の一部であることをまじまじと思ひ出させてくれる、「エコ・トイレ」とでも名付けたくなるタイプのトイレだ。

海岸沿いの森林地帯でも、内陸のサバンナでも、村落では一般に設備としてのトイレというものは無い。わたしがしばらく居候をさせてもらったコートデボワール南部森林地帯の、イネやヤムイモの農耕をおこなっているバウレ人の村で

は、森のなかの空き地に集村を作っている村人が排便するとき、村はずれの森に入っしてしゃがむ。すると待ち構えたように放し飼いのブタが、たいていは親子など数頭で、喜びに鼻を鳴らしながらどこからともなくあらわれて、ヒトの大便を出るそばからきれいに食べてしまう。

ブタにはとくに餌は与えていないが、排便をする住民の数に比べて、ブタの頭数はたいしたことはないから、ブタの食料のかなりの部分は村人の排泄物でまかなわれていたのではないだろうか。もともとブタは、アジアでも、それとは独立に家畜化されたといえるヨーロッパでも、人家のトイレの下に飼ひ、人糞も活用して養っていたのだから、ヒトとブタの食いつ食われつの関係は、西アフリカに限ったことではない。ただこのバウレの村で面白いと思ったのは、ブタの大便は、やはり放し飼いでいつもかなり飢えているイヌが、きれいに食べてしまうことだ。

わたしが長く暮らしたサバンナの、焼畑農耕を生業とする、二、三戸ずつかたまっているが全体としては散村の集落でも、ふだん食べるオクラやナスなどを作っている家のまわりで(挿画1)、作物の繁みにしゃがんで、村人は用を足す。家のまわりでとれるこれらの野菜は、トウジンビエやモロコシの粉を水に溶いて火にかけて練った(挿画2)、ソバ掻きに似た主食をつけて食べる、汁の実にするのだ。

(挿画1)
サバンナの菜園=
トイレのみり、オクラの実



(挿画2) 穀粉を水に溶き
火にかけて練る

サバンナの農耕民モシのことは、この汁のことをゼードというのだが、面白いのはこの汁の実がとれる菜園(トイレ)も同じゼードということではよぶのだ。何だ、フランス語でポタージユ(元来フランスの農民食で、食べ残しや固くなったパンなどをほり込んだ野菜のこった煮汁)ということばに由来する、ポタジエ(家まわりの菜園)と同じじゃないか、とわたしは思った。ただ、フランスの田舎では、菜園はトイレではなく、トイレの床下でブタを養うのだから、エコシステムのなかでの循環のあり方が少し違っている。

長い空洞を落下し乾燥

西アフリカ内陸の、とくにサハラ砂漠に向かって弓なりに突き出た、ニジエール川大湾曲部には、北アフリカとの交易で栄え

た都市が古くから発達した。日干し煉瓦を積み上げて造った二階建ての人家が密集するこうした都市では、トイレは何と二階の屋上にあるのだ。つまり排便孔の下は、地面まで五、六メートルの高さの、一辺が一メートル余りはある立方体の密閉された、日干し煉瓦造りの筒になっている。上で排泄された便は、この高い空洞を落下して、底に蓄積されてゆくのだ。

この地方は乾燥がはげしいから、糞便はたちまち乾いて、第一密閉されているから、ハエが産卵してウジが湧いたりする恐れはないだろう。でも、何年か経てば、ひからびた糞が上まで積み上がるのでは…という、心配性の人類学者の質問には、そうなる前に、家が壊れて建て直すという答えが返ってきた。取り壊しのとき、蓄積され粉末化した糞便が、あたり一面に舞い上がるさまを想像して、思わず鼻をふさぎたくなるのは、狭い湿った国から来た人類学者の、取り越し苦労というものかも知れない。



ジェンネ市街地の高層トイレ、正面と右(マリ)

循環的活用 —中国—

横山 廣子
(よこやま ひろこ)

本館民族社会研究部



メタンガス・トイレの発酵槽

急激な経済発展をとげている中国では、最近、政府が補助金を出して農村部で新しいトイレの普及プロジェクトが進められている。それは衛生メタンガス・トイレあるいはエコ・トイレなどとよばれるものである。人や家畜の糞尿、生活污水などを発酵槽のために、発生するメタンガスを炊事や照明用に使用する。衛生の向上とエネルギー不足問題とを一挙に解消する妙案というわけである。二〇〇七年中には国家予算の特別

資金を使い、全国の二六〇万世帯の農家にこの設備を導入するという。

このトイレ・プロジェクトは、現実には直面する問題の厳しさに加え、中国におけるトイレを取り込んだ循環系の長い歴史を思い起こさせる。後漢時代の墓から明器(死後の生活のために道具や建物を模造した器物)として出土する陶楼のなかには、トイレの下に豚囲いが作られているものがあり、人間の糞便を豚の餌としていたことを如実に示している。これと同様の方式のトイレが残っている農村が今でも地方にはある。そもそも穢れや便所、豚小屋を意味する「溷」という漢字の存在は、古代からトイレと豚小屋が一体となっていたことをあらわしている。

人糞の循環的活用という点では、もちろん、日本でもそうであったように、肥料としての利用が重要な位置を占める。一六世紀の半ばに中国を訪れたポルトガルの冒険商人、フェルナン・メンデス・ピントは、『東洋遍歴記』中で、人糞売買の盛行に驚いたと書いている。人糞を積み込む船がひとつの港に二、三〇〇隻も入港することがよくあり、富商も多かったという。買いつけ人は求める品の名をあらかじめ唱えることを避け、板を打ち鳴らしながら町を歩いて人びとに用件を知らせた。人糞は他の肥料より良質と見なされ、休耕地に改めて播種するとき用いられ、その効果が著しいため中国では年に三回も収穫があると記している。清代末期の『北京民間風俗百図』中

にも「拾糞図」がある。桶を担ぎ、右手に鉄の掬い具、左手に灯りを掲げている姿に浸透の度合いがつかがわれる。

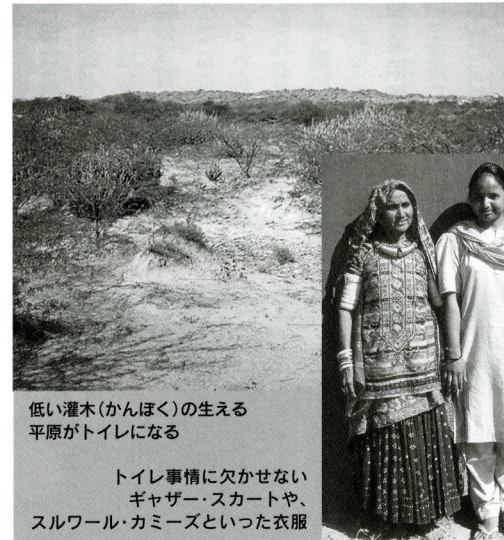


「拾糞図」

トイレは野天で —インド—

金谷 美和
(かねたに みわ)

本館外来研究員



低い灌木(かんぼく)の生える平原がトイレになる

トイレ事情に欠かせない
ギャザー・スカートや、
スルワール・カミーズといった衣服

インドでは、トイレは野天である。都市部では、各家屋にトイレが整備されるようになってきているが、農村ではトイレのない家屋も多い。用を足すときは、手に水の入った容器をもって、野外に出る。わたしの調査地であるインド西部カッチ地方は、雨が少ないために森がなく、石ころだらけの砂地が広がっている。適当な場所を

見つけて、しゃがむのだ。用を足すと、右手で水を流しながら左手を使ってお尻を洗う。紙は用いない。

車で移動する旅の途中では、人家から離れて、また放牧のヤギや牛の見えない場所で、トイレ休憩をとる。長距離バスでの旅行でも、休憩所のトイレが清潔でないことが多く、乗客はバスを降りると人気のない方角に三々五々散っていく。小指を立てるのが、「おしっこに行きたい」というボディ・ランゲージだ。

また、女性にとつて気になるのは身体の露出であるが、この問題にはインドの衣服がよく機能し、解決してくれる。インド女性の衣服は布がたっぷり用いられている。インド西部の伝統的な女性の衣服であるギャザー・スカートや、近年着用されるようになってきたサリーやスルワール・カミーズといった衣服は、しゃがんだとき女性の下半身をすっぽりと覆い隠してくれるのだ。これがTシャツにジーンズだったら大変だ。お尻は丸見えになってしまし、人が来ないか周囲をうかがいながらしゃがむはめになってしまう。インド旅行をする女性は、Tシャツとジーンズ着用はやめたほうがいいと思う。

一九九七年にわたしがインドに来たばかりのころ、首都デリーで下宿していた大家に、なぜ孫娘にジーンズをはかせないのか聞いたことがある。デリーの大学ではおしゃれな女子学生のあいだでジーンズが流行し始めていたにもかかわらず、孫娘は一本のジーンズももっていないからだと一言。そのときのわたしはぴんと来なくて首を傾げたが、後に野天のトイレに行くようになって、合点がいったのである。インド女性のあいだでジーンズが普及しないのは、案外このようなどころに理由があるのかもしれない。

日本との トイレつながり —トルコ—

木村 周平
(きむら しゅうへい)

東京大学大学院総合文化研究科



トルコ式トイレ。滑らないよう、足の踏み場がギザギザになっている。用を足した後、バケツの水で流す

トルコ人が「トルコ的であるもの」について語る時、誇らしさと恥ずかしさが入りまじった、微妙な笑顔を見せることがある。トイレについて語るときもそうだ。たとえば、親しくなったトルコ人とチャイを飲みながら話している、あなたがちよつと中座する。帰つてくると、彼(あるいは彼女)はおすおすところ訊くかもしれない。

「もうトルコ式は慣れた?」と。

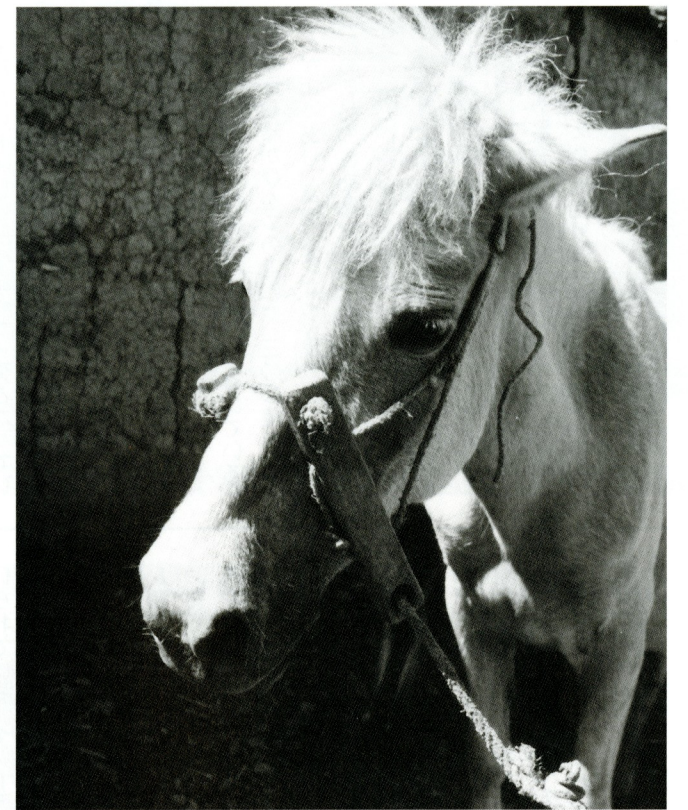
「トルコ式(アラ・トゥルカ)」とよばれるトイレは、金隠しがなく、ドアを向いてしゃがむという違いはあるが、いわゆる和式とよく似ている。腰掛けタイプの洋式(トルコでは一般にアラ・フランガ、つまりフランク式とよぶ)に対してトルコ式と自分の国の名前をつけているのも同じである。「トルコ式はトルコ独自のものだ」と誇らしくもあり、一方でトルコがモダンでないことのアラわれのようで、ちよつと恥ずかしくもある。日本人が和式に対して持つ感覚とよく似たところがあるのではないだろうか。しかし、実際には多くの国でこのしゃがみ式・金隠しなし型のトイレが使われているのだが、それを知っているトルコ人は多くない。

ところで、こうして「トイレつながり」の日本とトルコが、実際にトイレをめぐって交流したことがある。それは一九九九年にトルコで起きた大地震の際で、日本から救援物資として簡易トイレが送られた。今年七月の新潟県中越沖地震でもあつたように、災害で水道が止まるとトイレが使えなくなり、深刻な問題を生む。排泄物や臭いをどう処理するか、排泄の空間の快適さや安全性をどうやって確保するか…。逆にいえば、トイレがふだん何を可能にしてくれていたかが、そのときはじめて見えてくるのだ。

トルコの被災地では各国から送られたトイレが届く前に、路上にあるマンホールのふたを外して足場をつけ、即席の「トルコ式」トイレを作っていた人びともあつたという。地震に負けない日常の回復は、日本でもトルコでもきつと、トイレとともに

特集 トイレ

中国四川省の自治州で撮影した馬
体高110センチメートルほどの小型馬。棒締頭絡をつけている



モノ グラフィ

棒締頭絡

小島 摩文(こじま まふみ)

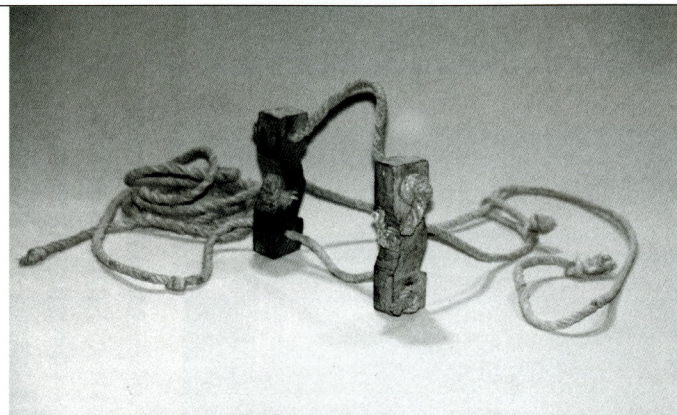
鹿児島純心女子大学准教授

がなく、これだけは「轡」という文字から馬の制御具であろうと推測できるだけである。しかし「鞍および付属用具」の方は鞍や鞍敷などといったしよに制御具が収集されており、明らかに馬具だとわかる。これが「轡一雙二箇」と同じように動物の角製で機構もよく似ていることから、「轡一雙二箇」も馬の制御具の一部だということの傍証となる。

博物館の収蔵庫には来歴がよくわからない資料がたまにある。特に小さな町の歴史資料館などでは資料カードがないことも多い。また高度成長期をへた昭和四〇年代ぐらいいから農村でも家の建替えがすすみ、使われなくなつて納屋や床下、屋根裏などに保管された農具などの民具をとにかく集めるだけ集めたという自治体も多く、未整理の資料を廃校舎などに集めてあるだけの資料というのはいくつか見てきた。

そんな資料のなかにもわくわくするような資料がある。それらを調査することをわたしは密かに「収蔵庫考古学」とよんでいる。実物の資料とわずかな手がかりからその「モノ」が何かを導き出していく「学問」だ。そうした小さな鍵がまたフィールドへの手がかりとなりわたしたちを導いてくれる。

棒締頭絡



中国雲南省
原野農芸博物館の現館長・原野耕三氏による収集



喜界島
(標本番号 H18582~H18586)



中国四川省
チベット族が使用(標本番号 H 148384)



「轡一雙二箇」
中国内モンゴル自治区蒙古人が使用
(標本番号 H25150)

みなさんは「棒締頭絡」という馬具をご存じだろうか。日本ではおもに琉球列島で使用され、ウムゲー、ムゲー、ンゲーとよばれている。民俗学者の下野敏見先生が精力的に調査・研究されていた馬具だ。民具研究者のあいだでは長く沖縄県と鹿児島県の一部での事例が知られているだけであつたが、後に北海道でも遅くとも江戸時代から棒締頭絡が使用されていたことがわかつてきた。北海道では一般に「ヒョウシ」とよばれている。

馬を制御する道具としては一般にハミがよく知られている。ハミは馬の口のなかに金属製の棒をかませて馬の口角を刺激することで制御する方法である。また、馬を厩舎につないだり、乗馬せずに馬を引いて移動させる際には、無口頭絡とよばれるハミの付いていない頭絡が用いられる。

棒締頭絡はハミとも無口頭絡ともちがい、二本の木片を馬の鼻梁部にかかけ、もう一方の端に手綱をとおす構造になっている。手綱を引くと木片が締まり馬を制御する仕掛けとなつている。

下野敏見先生は一九七〇年代から、大陸部(東アジア・東南アジア)でも棒締頭絡が使用されていたはずだと仮説を立てていたが、証拠は見つからなかつた。

ところが、一九九四年に、奄美大島にある原野農芸博物館が収集した中国雲南省の資料のなかに棒締頭絡が含まれていた。当時、原野農芸博物館に勤務していたわたしは、その翌年中国四川省涼山イ族自治州とタイ北部の少数民族の村を調査し、棒締頭絡を探し求めた。そしてめぐりあつたのが上記の馬の写真にある棒締頭絡である。

帰国したわたしは報告書を書くために日本国内のさまざまな博物館に連絡をとり、棒締頭絡について尋ねた。民博にも喜界島出身の民俗学者・岩倉市郎氏が収集した喜界島の棒締頭絡「ウムエー」があることがわかつた。欲を出したわたしは民博の検索システムを使い「馬」「ウマ」をキーワードに検索し、写真のある資料は写真で、写真のない資料は収蔵庫で現物を見ることにした。

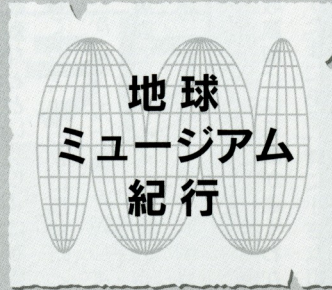
なかでも「馬」という標本名の資料が数点あり興味を引いたが、結局すべて馬の人形であつた。

こうして調べたなかから「轡一雙二箇」と「鞍および付属用具」を見つけ出し、棒締頭絡と確認した。「轡一雙二箇」は、騎馬民族征服説で有名な江上波夫氏が一九四一年に中国内モンゴル自治区で収集した物である。使い方に関するデータ

ハノイで人気の博物館

樫永 真佐夫 (かしなが まさお)

本館民族社会研究部



ベトナム民族学博物館/
ベトナム

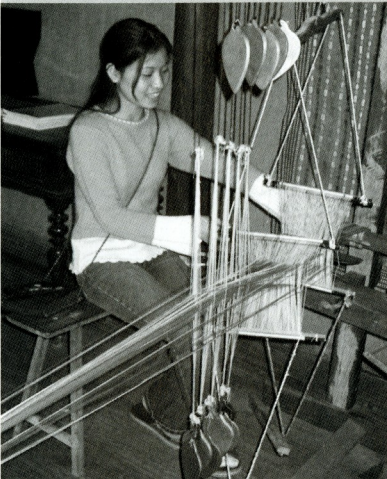
グハウスで寝泊まりするのだという。展示家屋に人を生
活させるという荒技は、ベトナムにかかわり続けてきた
わたしにとって、なんだか微笑ましかった。
この博物館は、諸外国の博物館や研究者との交流を通
じて次々に新しいアイデアを取り入れ、特別展開催、
地域住民や駐在外国人家族向けのワークショップ、地方
の博物館職員向けの博物館学研修など、さまざまな新し
い試みを実施している。まもなく一〇周年。民博より規
模はずっと小さいながらも、年間一五万人を集客するハ
ノイで人気の博物館である。

一九九七年八月のある雨上がりの朝、わたしはハノイの郊外で泥濘にタイヤを取られたバイクをついに放り出して、膝まで泥をはね上げながら道を急いだ。草ぼうぼうの休耕地のあいだに屑置き場などが並ぶ、くすんだ景観とは不釣り合いに真新しい白亜の建物が、すぐそこに見えている。
門が開いていないので塀を越えて入り、ガードマンに「フイ館長と約束があるのだが」と告げると、「いくらなんでも、今日は休みだろうよ」と、覚悟していたとおりの答えが返ってきた。仕方なくお茶だけごちそうになって帰った。
それから二カ月以上経ち、ハノイから四〇〇キロメートルも離れた村でわたしが調査をしているあいだに、その建物はベトナム民族学博物館として盛大にオープンしていた。五四民族を擁する民族的、地域的多様性を国内外の人びとに紹介し、文化関連の問題解決に向けた提言もする研究博物館である。

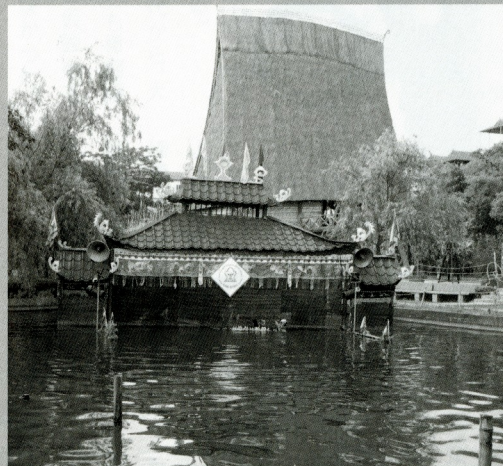
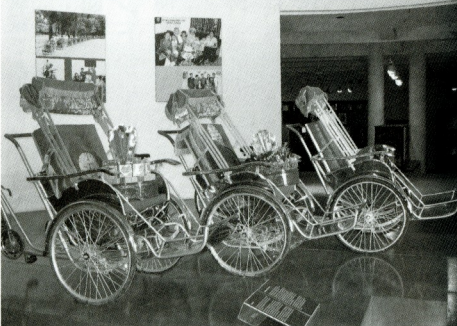


ベトナム民族学博物館本館展示場正面

チャム族家屋内に展示された伝統織機。
来館者も手を触れることができる



定期的に特別展示も開催される。
写真は2006年上半期の結婚式に関する展示



池に水上人形劇の舞台を設置。
村落から継承者をよんで定期的上演もされる。
舞台の背後にはバナ族の家屋がそびえている

翌春にハノイに戻り、調査報告のために訪ねて驚いた。まず、わたしのバイクを苦しめた名もない道が、片側三車線もある堂々たる大通りになっていた。しかも通りの名は、初代館長の父で、有名な民族学者グエン・ヴァン・フエン。さらに、開館数カ月前に蜘蛛の巣とホコリにまみれていた建物内部は、控えめな光に展示品が奥ゆかしく照らし出されていて、垢抜けてさえ見えた。
当時、本館の裏手はほとんどサラ地であった。それが今では、諸地域の民族の伝統建築物がいくつも移築され、野外展示場の名に恥じない。これからも家屋はもっと移築されるのだという。
一昨年前、野外にあるエテ族のロングハウスに入ると、内部の各房に個人の着替えや荷物が並び、囲炉裏も使用されている気配であった。そこを見慣れない白装束の男性たちが、出たり入ったりしている。ことばもベトナム語ではない。尋ねてみると、皆チャム族であった。チャム家屋の修繕のために来ていて、終わるまでエテ族のロン

じんこう 沈香のかおる香炉

香炉(標本番号H197771、高さ/8.3cm 幅/14cm 奥行11cm) マレーシア

信田 敏宏(のぶたとしひろ)

本館研究戦略センター

このきらびやかな香炉の収集地であるマレー半島西海岸のマラカには、プラナカンとよばれる人びとが住んでいる。プラナカンとは、一五〜一六世紀ごろにマラカ王国にやってきた中国系移民の子孫である。移住当初、プラナカンの祖先たちの多くは現地のマレー人女性と結婚した。彼らは、食べ物や衣装などにマレー文化を取り入れながらも、独自の文化を保持してきた。

さて、この香炉であるが、これは大伯公たいはつこうを祭る家庭用祭壇のセットの一部である。おそらく、プラナカンの人びとも日常的に使用しているものであろう。大伯公とは、福德正神の俗称で、中国人の開拓者として守護神化したものである。一般には土地公とよばれている。マレー人の土地神と融合したのも見られる。マレー文化を取り入れた



プラナカンの人びとにとっても、身近な神であるにちがいない。

ところで、香炉で焚かれる香の原料には沈香が含まれている。沈香とは、ジンチョウゲ科のアクイラリア(Aquilaria)属の樹木から採取される芳香性の樹脂のことである。原産地は南中国から東南アジア、そしてインドにまで広がっている。質の良いものは高額で売買されているが、今日、枯渇が危ぶまれ、貴重な森林資源となっている。

わたしは、マレー半島の先住民オラン・アスリの村で調査をおこなっているのだが、森で偶然見つけた沈香を華人仲買人に売却して大儲けした話を村びとから聞いたことがある。この沈香は、マラカに運ばれて売られたのかもしれない。



アンデスとアマゾン間の狭間で

木村 秀雄

(きむら ひでお)

東京大学教授

高地は徒歩で、低地は船で

わたしは、南アメリカのアンデス高地とアマゾン低地を調査地にしてきた。そのふたつの地域で調査の仕方には決定的な違いがある。調査地へ入る交通手段がまったく異なるのである。アンデス高地では、自動車で行けるだけ近くまで行って、その後はひたすら歩かない。一方アマゾンでは、航空機で空を飛んで行った後は、船を使って川を上ったり下ったりする。高地でも低地でも自動車で行けるところが多くなったが、アンデスでは徒歩、アマゾンでは船が基本である。

アンデス高地とアマゾン低地は、自然環境も、社会文化のあり方も、先住民と国家の関係も、開発へのかかわりも大きく異なり、それぞれ独立した研究領域として扱われてきた。問題は中間地帯である。アンデス東斜面の下部にあたるアンデスIIアマゾン中間地帯は、基本的に急な斜面を徒歩で移動するしかなく、接近しにくい地帯であった。今では、道路もかなり整備され、船外機付きのボートも使われるようになったとはいえ、移動が不便な地域であることに変わりはない。

一五世紀以前の先スペイン期から中間地帯は、高地部のアンデス文明地帯とも、またアマゾン低地の先住民世界とも、関係があったのは間違いないのだが、それがどのようであったのか、確かなことはわか

らない。アンデスの文明地帯とは現在ではコカインの原料としても使われている儀式用のコカの葉や、木材、砂金の供給を通じて関係があったことは確かだが、アマゾンとの関係は皆目見当がつかない。

辺境の中間地帯へ

そこで二〇〇四年から、ペルーのアンデスIIアマゾン中間地帯をターゲットに調査を始めた。中央アンデスでは、中間地帯やアマゾン低地の先住民は、先スペイン文明を育んだ高地部の先住民とは別のものとして扱われてきた。アンデスの先住民はインディオとよばれ、これは蔑称でもあったのだが、それ以外の先住民は「インディオですらない」まさに「野蛮人」という扱いを受けてきた。しかし、このわけ方は「文明地の住民」と「その他」という区分でしかなく、アマゾンでいくつもの先住民と付き合った経験からすると、「その他」は極めて多様であるはずである。

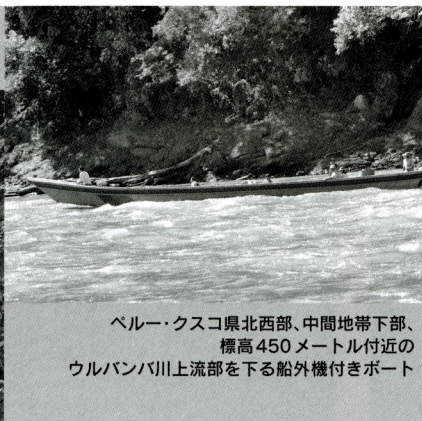
かつて人びとの移動は、アマゾン低地では川の downstream 上流へと、アンデス東斜面では上から下へと、おこなわれた。中間地帯はどちらの地域にとっても辺境であり、アラワク系の言語を話す先住民たちが暮らす、アンデスでもアマゾンでもない、独自の領域を形成していた。アマゾン低地の先住民と中間地帯の先住民を十把一絡げに扱うことはできない。

わたしはアンデスでもアマゾンでも、国家や文明にとつての辺境地帯を研究してきた。アンデスIIアマゾン中間地帯という辺境について、これまでとは違う視点で研究を続けていきたい。辺境から中央を照射するのが人類学のひとつの使命であるからである。

ペルー・クスコ県中東部、中間地帯上部、標高1200メートル付近で、木材を運搬する途中バンクのため立ち往生したトラック



ペルー・クスコ県北西部、中間地帯下部、標高450メートル付近のウルバンバ川上流部を下る船外機付きボート



時	論
新	論
理	想 論

思い出よ、思い出よ、私の思い出よ

佐藤 浩司

(さとう こうじ)

本館文化資源研究センター

積み重なる歳月

私は東京で生まれ育った。けれど、今故郷にもどつても自分の慣れ親しんだ景観はもうそこにはない。遊び場だった空き地には見知らぬ人たちが住み、勝手知ったる家はマンションに変わっている。それは時代のながれ、自分が齢を重ねたというだけではないか。かれこれ二〇年ぶりにインドネシアの調査地を再訪するまでは、なんの不思議もなくそう思っていた。

村には巨大なパラボラアンテナが目立つようになっていたが、昔の集落景観は何ひとつ変わっていなかった。ふらふらと村の敷地にふみ込んだ私は、自分の名前を呼ばれて立ち止まった。まるで二〇年という歳月はここに存在しなかったかのように。声の主は当時小学生、私は村の子どもたちを案内役によく森の写真を撮りに行ったのである。その彼も二児の父親になっていた。

歳月は消え去り置き換わるものではなく積み重なるものだ。それはこの国の経済政策の失敗もたらした貧困の結果にすぎないのかもしれない。もしそうだとすると、個人の思い出よりも社会的論理を優先させねばならない理由はいつたどこにあるのだろうか？手をこまねいてこの現実を受け入れることしか私になすすべはないのか。

津波被害を受けたアチエの村では、その変わり果てた景観に私は打ちのめされることになった。かつて実測調査した家はもちろん、海岸沿いに開けていた村は跡形もなくなくなり、瓦礫の残る荒地に復興住宅がぼつりぼつりと建ちはじめていた。村人の運たぐしさの証などではない。多くは津波後に村外からやって来た者たちだった。三〇〇人以上いた村人のうち生き残ったのはわずか七人。お世話になった家族の所在を捜していた私を迎えてくれたのは、たまたま村を離れていて助かった女性だった。私はこの村の在りし日の姿を知っている。ただそれだけの理由で、私は被災者である彼女から十分すぎる歓待を受けた。

私がほかならぬ私であるという確信はいかに脆もろい基盤の上に成り立っているこ



津波は、人命はおろか村にあることごとくの物を奪い去る。写真さえ残さず(2007年)

とか。私の生きた場所、私を知る人、それらの存在なしに、私はどうして私であり続けるだろう。

精神文化の復権

ある人間が一生のあいだに経験する内容をすべて電子的な記録にとどめることは技術的に可能なのだという。それに近いことを実践している現代の冒険家さえいる。そんな試みにいったいどんな意味があるのかと私だって思う。八〇年分の他人の映像を見ていたら自分の人生が終わってしまう。けれども、こうした技術の行き着く先は間違いなく人間の価値観や死生観を変えてゆくだろう。いったい私たちの信じる知識や歴史とは何なのか？生き甲斐や社会はどうなのか？

インターネット上では個人のブログが流行し、電車のなかではみな一心不乱に携帯電話に向かっていている。これは仮想現実などではない。かつて民族誌には物質文化と精神文化という二大分類項目があった。精神文化のほうは、迷信として退けられ、宗教に取り込まれてしまった。現代社会に生きる私たちは精神文化とよぶべき対象を長いこと見失ってきたのだ。そして今、パソコンや携帯電話の画面の先に現代人が覗いている世界…、それは、まぎれもない精神文化の復権の兆しなのだと思ふ。

外国人 として 生きる

僕の幸せ

—ニッさんがタイ料理屋をひらくまで—

岡部 真由美 (おかべ まゆみ)

総合研究大学院大学文化科学研究科

看板に誘われて

大阪はミナミのど真ん中。夜になると一帯にネオンが輝くこのミナミの街に、ニッさんが店を構えてからもう七年になる。

昨年一〇月。北タイ・チェンマイから、わたしが調査中にお世話になったホストファミリーが来日し、わたしは彼らのもてなしに追われていた。いよいよ明日が帰国というときになって、ホストファミリーは、わたしとわたしの両親に対するお礼として、タイ料理をこちそうしたいと言いつつ出た。突然の申し出に困りかけたとき、たまたま目に飛び込んできたのがタイ国旗の付いた看板。何の迷いもなく店内へ入ったわたしたちを出迎えてくれたのは、偶然にも、ホストファミリーと同じ県、同じ郡出身の調理人だった。ホストファミリーは、ここが大阪であることを完全に忘れて、しばし北タイ語での話に花を咲かせていた。日本滞在の最後を締めくくる、よい思い出ができたと思う。そこがニッさんの営むタイ料理屋だった。

あれから約一年が経ち、再びニッさんの店を訪れると、その調理人はもういなかった。タイへ帰ってしまったらしい。彼の代わりに、ニッさんは自ら厨房に立ち、おいしい料理を手際よく作ってくれた。

働き、そしてまた働く

ニッさんの名は、ティーンラテト・ウオンクリー。父親は警察官、母親は教師。経済的に恵まれた家庭の三男として、サコンナコン県で生まれた。ニッさん誕生後すぐ、一家はナコンラーチャーシーマー県へと移住。育児のために教師を辞めていた母親がごはん屋を始めようになると、小学生のニッさんは、毎朝三時半起きて買出しを手伝い、学校が終わるとまた店を手伝う生活を続けた。このころ、母親から教わった料理の数々が、今のニッさんを支えている。

高校卒業とともに、ニッさんは思い出のつまった東北タイを後にし、首都バンコクで大学進学し、兵役についた後、運輸手、警備員など仕事を転々とした。

一九八八年、二六歳だったニッさんは、当時の海外出稼ぎブームに乗って、一路クワエートへ。初めての外国で、ニッさんは調理人として働き、稼ぎのほとんどをタイへ送金していた。しかし、タイへ戻ったニッさんの手元には一パーツも残されなかった。とにかく、働かねばならなかったニッさんは、続いて日本で働くチャンスを与える。「何県か知らないけど、アヤセというところ」で、中古車修理の仕事に従事。さらに二年間、大阪の飲食店で働くうちに、「日本で自分の店を開きたい」との夢を抱くようになり、いったんタイ

へ帰国した。

ところが、現実はその簡単ではなかった。再入国のビザが下りないのである。業を煮やしたニッさんは、日本語の能力を生かそうと、世界有数の観光地・チェンマイに飛び込んだ。そこで出会ったのが、日本から旅行にやってきた寧美さん。二人はめでたく結ばれ、結婚後、寧美さんも現地の旅行会社で働き始め、息子を授かった。出身地を遠く離れてチェンマイで出会った二人は、「自由のタイ」の意味を込め、子どもに「タイタイ(Tai, Thai)」という名前をつけた。それは現在、二人の店の名前にもなっている。

再来日は家族とともに

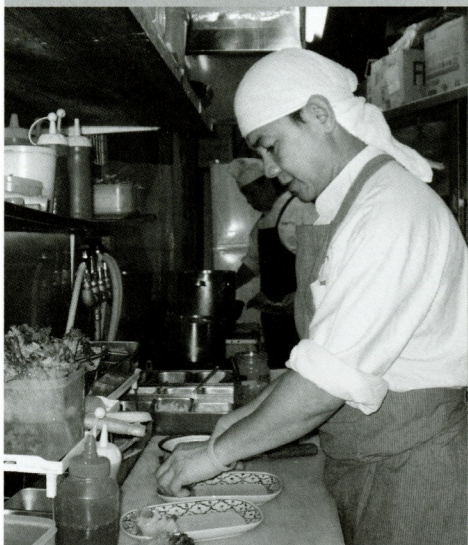
息子の誕生後、ニッさん一家が選んだ道は、大阪への移住だった。不思議なこと、一家を大阪に向かわせたのは、寧美さんではなく、ニッさんの方である。寧美さんは大阪出身ではなかったし、大阪に縁があるのはニッさんだけだったからだ。かつて自分の店をもつことを夢見て、単身でタイへ戻ったまま再入国が実現しなかったニッさんは、まさかこんな風に、自分が家族を連れて大阪へ戻ってくるようになるうとは思ってもしなかったのである。

河内長野市内の食品用トレー工場働いた後、一家はミナミに進出。ニッさんは

入り口の大きなタイ国旗が
お店の目印



厨房で腕を振るうニッさん



マッサージ店への客を笑顔で迎える寧美さん

忙しい仕事の合間を縫って
スタッフとともに



最近、力を入れ始めた
雑貨販売



知人のもとを訪ね歩き、自力で店経営のあれこれについて学んできた。二〇〇〇年一月。ついに、ミナミの繁華街・宗右衛門町の一角に、タイ語・日本語の曲がそろうカラオケ・パブを開店。続く二〇〇一年にはミナミのターミナル駅・なんば近くにタイ料理屋、二〇〇四年には料理屋の二階にタイ古式マッサージ店を開店。さらに雑貨販売も開始。今まさに波に乗っている。

両親、二人の兄ともに公務員という家族のなかで、ニッさんは一人だけ、場所も職業も転々としながら、しかし一貫して自分の力で身を立てて生きてきた。「もう日本に来てから七年も経ったのか？ あつという間だね」と笑って言うニッさんには、これまでの人生でぶつかってきた数々の苦労のかけらも見当たらない。そんなニッさんに将来の夢を聞いてみた。現在四五歳の彼の答えは、意外にシンプルだった。「ここでの生活に満足しているし、これ以上望むものは何もない。僕が働くのは、自分の死後、子どもが困らないため」。

今の日本に、家族の幸せが自分の幸せと断言できる人がどれほどいるだろうか、とふと思った。しかし、迷いなくそう言い切るニッさんと話すといつも、何かスポーツの後に似た、スカッとした気分になるのである。

予期せぬことがいっぱい —中国での映像取材—

塚田 誠之 (つかだ しげゆき)
本館先端人類科学研究部



ミャオ族の闘牛大会

映像取材をおこなうときには、対象に関する一定程度の予備知識が必要だ。ただし、予測しにくい場合も多々あり、計画を立ててもそのとおりに運ぶとは限らない。これまで筆者が映像取材に携わった回数はそれほど多くはないが、そのなかから若干の経験談を披露しよう。

予測しにくい例として二〇〇六年一月にミャオ族の正月行事の取材をしたときのことを挙げよう。貴州省東南部の黔東南ミャオ族トン族自治州の雷山県では旧暦の一〇月中旬に正月「苗年」を過ごし、その活動の一環として闘牛大会をおこなう。それは農民が主催するもので、自然の河原を利用した闘牛場を舞台に耕作用の水牛が二頭、角を合わせて戦う勇壮な行事である。片方の牛が逃げればその時点でもう一頭の牛の勝ちである。勝負がつくまで試合は終わらない。

我々は当地では有名な強い牛を取材の対象としたが、その牛が属する組はのべ七〇頭が参加した。優勝賞金は一万八〇〇円で、以下八等まで賞金が出る。また街の電気店がスポンサーとなつて優勝者に冷蔵庫、二等にはカラーテレビと農民にとっては魅力的な賞品がそろえられた。簡素な観覧席が設けられたが、数千人もの観衆の多くは柵のない河原や川の対岸の土手に思い思いに陣取り、観

戦していた。河原の観衆は闘牛から目をそらすことができない。というのはいつ牛が自分のいるところに突進してくるのか予測がつかないからである。「群衆なだれ」もこわい。

我々はおもに河原で取材し、たいへん迫力のある映像を撮ることができた。しかし、取材の対象とした牛が勝ち残れるかどうか心配であった。できるだけ多く勝ってくれば迫力ある激闘シーンを存分に撮影することができるのだが、その牛は年をとつて峠を越した感があり、しかも相手は強豪そろいである。我々の心配をよそに、その牛はさいわい順調に勝ち上がつて優勝したが、なにぶん相手は牛のことで予測がつかなかった。

変わりゆく行事、不測の天候

次に、二〇〇四年九月にチワン族の中秋節の取材をおこなつたときのことを挙げよう。広西西部の靖西県の県庁所在地の街での中秋節は、竹ひこでウサギのかたしを作り、その上から紙を貼り、夜に火をともした口ウソクをなかに立てて子どもたちが曳く。この灯籠は車輪付きだ。また、サボンに線香を挿して点火し竿先に付けて夜空に高く掲げる。この活動は今では当地に特徴的なものになっている。一九九八年に調査をおこなつたことがある。そのときは、サボン灯は、

できなかつたのは残念であった。

礼儀と仕事との兼ね合い

予測がつきにくいことではないが、撮影班は現地の人々の習慣に慣れる必要がある。食べ物もやはり。広西西部の民族地域では名物料理のひとつとしてソウギョの刺身がある。酢やシヨウガ、塩の入ったタレに漬けて軽くしめ、多くの薬味を使う。しかし寄生虫の心配があるので、我々は刺身をできるだけタレに長く漬けてから、焼酎と一緒に飲み下して消毒するようにした。筆者は何回かこの料理を味わう機会があつたが今のところ無事なようだ。

また、モチ米の醸造酒も貴州や広西の民族地域の名物である。しかし、たいへん口あたりがよいので、ついつい飲みすぎる。飲みすぎれば足をとられてしまつ。我々取材班もそうした経験をした。ミャオ族の場合、家に入るときにまず三杯、ついで乾杯にも三杯……となるので飲みすぎるほうが普通なのだが、人々の心づくしのもてなしに対する礼儀と撮影の仕事との兼ね合いは結構難しい。

筆者の経験はまだまだ不十分だが、こうした経験を通じて、映像を作り、発信することの喜びを少しずつ感じはじめていく。

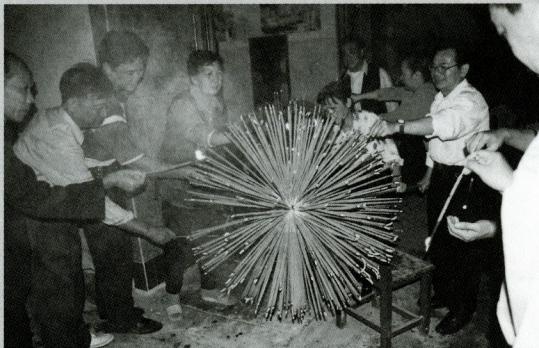
多くの見物客が見守るなか
河原でおこなわれる闘牛大会



多くの観光客が訪れ、
大観光スポットになっている龍脊(りゅうせき)の棚田



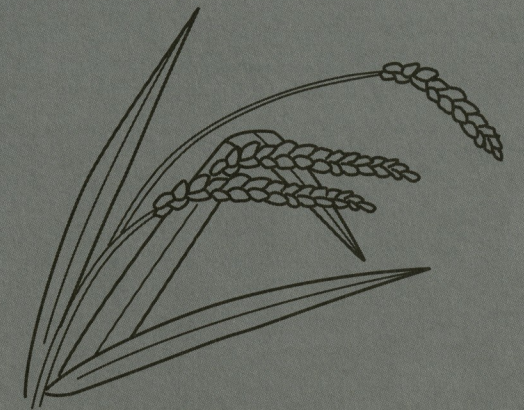
ザボン灯に挿した線香に点火



ウサギのかたちをした灯籠を曳く子ども

生きもの 博物誌

【イネ】
中国



米のある風景

長谷 千代子
(ながたに ちよこ)

本館外来研究員

親戚は助け合う

「今日はうちが息子夫婦の部屋を建て増しするので、弟たちの息子が三人、手伝いに来てくれたよ。田植えや稲刈りなどで人手がいるときも、近所の親戚は必ず助け合った。一日の作業が終わったら、夕食をご馳走して労をねぎらう。お金なんかでケリをつけたりしない。日雇いじゃないんだし、いずればわたしたちが彼らに恩返しする機会もあるのだから。こうやって親戚付き合いを続けていくのが、タイ族っていうものだよ。」

今年の春、調査地でいつも世話になる家を夕刻に訪ねると、普段は寡黙なおじさんが、仲間たちと囲んでいた食卓にわたしを招き入れ、いつになく多弁に話した。おじさんは、雲南省西部のミャンマー（ビルマ）国境に近い徳宏（とっこう）というところに暮らすタイ族である。タイ族

は雲南省の山間に点在する盆地などで、唐代までに一定の灌漑技術による稲作をおこなっていたと思われる人びとである。

米のある生活風景はあまりにも自然なのでつい見過ごしそうになるが、祭りや儀礼のなかでの米の使われ方を見ると、その重要性を再認識させられる。たとえば正月、人びとは親戚の家を集まり、餅つきをする。足踏みタイプの杵での餅つき風景は少なくなつたが、おじさんの弟の家では、最近までこの種の杵を使つて餅をついていた。つき上がった餅は小さく丸めて扁平のばし、バナナの葉で包んで保存する。食べるときは葉を外して焼き、砂糖をふりかける。かつて日中戦争の後期に、ミャンマー方面から徳宏に侵入した日本軍が二年半ほどの地域を占領したが、その兵隊たちはこれを見て「こんなところで餅にありつけるなんて！」と大喜

びしたそうである。他にも、村の神を祀るときには**粳米**と白米の両方を神廟のまわりに撒き、仏像奉納儀礼の際にはポップコーンのように弾けさせた米を撒く。祖先に捧げる食品には、炊いたご飯が欠かせない。また、アジアの稲作地帯に広く分布する稲霊信仰が徳宏にも見られ、稲霊の神の腕を丁重に引く仏陀の塑像が、上座仏教寺院のなかに置かれていることもある。

田畑を失って

しかし現在、稲作をとりまく状況は激変している。都市近郊の村では開発のために多くの水田が政府に買い上げられ、人びとは転業を余儀なくされている。農業を続けていても、米以外の商品作物に切り替えたり、その儲けでより貧しい山地民などを小作人として雇つたりする人が出てきた。おじさんが多弁だったのは、稲作とそれになつたる儀礼や助け合いをおろそかにする人が、タイ族のなかにも増えてきたことが不満だったせいである。

田畑を失つても、都市的な生活に移行できればまだよいが、農民としての生活習慣は一朝一夕には変えられないし、まして少数民族となると、漢族が圧倒的多数を占める中国社会で就職戦線を勝ち抜くにはハンディが大きい。おじさんの息子夫婦にしても、都会での職探しに失敗して心ならずも帰郷し、わずかな田畑を村から借りて農業を始めるのである。そのおじさんの家のすぐ裏の水田はすでに潰され、近く宅地になることが決まっている。

人の世の変化をおしとどめることはできないが、せめてその変化がおじさんたちにとって幸せなものであるように、祈らずにはいられない。



徳宏(とっこう)州の棚田



正月の餅つき

タイ族の田植え
(1998年)



右写真の最近の様子(2007年)



購入した仏像を村の寺に奉納する行列。女性たちが祝って撒いた米花がトラクターの台の縁に載っている



稲霊とその手をとるブツダの像



イネ (学名: *Oryza sativa*)

イネ科。古来、アジア地域の主要な食糧のひとつとして水田や畑地で栽培されてきた。中国では現在毎年約1.8億トンの米が生産されている。雲南省では昔からいくつかの少数民族が稲作をおこなっており、山間に開けた盆地や山の斜面に水田が広がる。香米や紫米、軟米、扁米などといわれる米が雲南各地の伝統的な特産となっており、野生の稲の種類も豊富である。緑の革命以来、ハイブリッド種への依存が進んでいるが、伝統的な品種や農法も見直されつつある。





狩猟採集社会の老人たち

林 耕次 (はやし こうじ)

本館外来研究員

のだが、実際の首長は彼の妹婿にあたるメナタという壮年の男性であった。バジールの父親は偉大な狩猟者として知られる長老の一人で、メナタの前に首長を務めていたらしい。バジールは、なぜ自分が首長だとアピールしたのだろうか。彼の親族にかかわるプライドのせいなのか。あるいは、単に見栄を張りたいからなのか。その理由は今でもよくわからないが、そういう謎めいた行動や、ときにずるいところを見せる人間臭さがどこもなく憎めない。その人柄ゆえにわたしのなかでバジールは特別に印象的で、あのかの笑顔のままに夢にもたびたびあられる。

自己犠牲的なトゥーマ

バカの人びとは、季節に応じて森のなかを遊動生活する狩猟採集民として知られてきたが、定住化政策などの影響もあり、現在では畑をもち、一年の大半を集落で過ごしている。しかし、ときおりおこなわれる森での狩猟採集活動では、トゥーマとよばれる一部の狩猟熟練者らが指導的立場をとることは、定住生活が浸透した現在も変わらない。トゥーマとよばれるには、狩猟経験の豊かさや森に関する知識の深さが必要なため、多くがある程度年配である。わたしの調査地周辺でも、もつとも偉大なトゥーマの一人として

て知られるモービは、ふだん寡黙で、表情はじつに穏和だ。そのモービが率先して森に赴き、蜂の襲撃を恐れず蜂蜜採集に挑む姿や、トゥーマとしての経験と知識がもつとも発揮される命がけのソウ狩猟を淡々とこなす姿は印象的であった。モービは自己犠牲的ともいえる行動に、自らの存在意義を見出しているのかもしれない。そんなモービがいざ森での狩猟採集活動を終えてキャンプや集落に戻ると、自分の孫と嬉しそうに戯れる。緊迫した森での行動とのギャップも相まって、わたしには一層微笑ましい情景として映った。

偶然とは思えない来訪

森のキャンプに滞在中、アンドウムという老人がふらっと訪ねてきたことがあった。彼はわたしが知る限り、いかにも集落で隠居生活を送っているような、のんびりした雰囲気を感じるところから醸し出していた。それがあの日、老人にとっては決して楽ではないと思われる半日がかりの森歩きを経てキャンプにひよっこりと一人であらわれた。

わたしは大変驚いた。それはちょうど、バカのあいだでも非常に重宝される野ブタが捕獲された日でもあった。野ブタは、狩猟者の手にかかることなく、その場の年長者であるアンドウムに任せ

たくましく生を満喫しているように見えた。その一端を紹介したい。

忘れられない笑顔

わたしが初めてバカの集落を訪れたとき、とりわけ歓迎してくれたのがバジールという名の老人であった。彼は満面の笑みで顔を歪めながらわたしに握手を求め、自分が集落の首長だと猛烈にアピールした。しかし、間もなく判明した

れ、腰に付けたナイフを使って手際よく解体された。聞けば、ある年齢や出自に属する者たちが野ブタやソウなど特定の動物を解体したり、食べたりすることは忌避されることがあるからである。解体を終えたアンドウムは、しばし森のキャンプに滞在したのち、自ら解体した肉の一部をもち、集落に戻っていった。彼の来訪はあたかも偶然ではないかのよう

儀礼の中心的存在

集落における精霊儀礼でも、老人が中心的な役割を果たすことがある。精霊ジェンギは「森の主」ともいえる存在で、バカにとって畏敬の対象である。このジェンギとバカの人びとを仲介する役割の男性は「ジェンギの父」と表現されるが、この役割を担う男性は、しばしは森の知識に深く精通する優れた狩猟者である。このとき、女性たちはコーラスで儀礼を盛り上げる。マレンゲという高齢の女性はとりわけ長身で、見るからに威厳を兼ね備えた容姿をしていたが、美しい歌声を奏でながら女性たちのコーラスの先頭に立ち、いわば指揮者の役割を果たしていた。また、男性に交じって、若い少年の踊りの指導にあたることもあった。

そのマレンゲが、わたしが森でのキャンプ生活を送っていた二〇〇一年三月に

儀礼における精霊ジェンギ



森で孫とくつろぐモービ



亡くなった。知らせを受けて一行とともに直ちに集落に戻り彼女の死を悼んだ。バカのみならず、近隣の農耕民や遠方から

らの来訪者も参加して、昼夜を問わず数日間をとおした盛大な葬礼が催された。マレンゲを知る多くの人びとに囲まれ、

わたしはそのとき、改めて彼女の偉大さを感じ知らされたのである。

儀礼に集まる人びと



アンドウムによる野ブタの解体

みんなく ウィークエンド・サロン 研究者と話そう



シリアの
街頭コーヒー売り
(18世紀)

実施日・話者・話題・場所

※ 詳細は、ホームページをご覧ください。

10月7日(日)

西尾 哲夫 (民族社会学部教授)
アラビアンナイトとコーヒー
於:西アジア展示

10月8日(月・祝) ★時間
15:30~16:30

信田 敏宏 (研究戦略センター准教授)
マレーシアのラマダーン
-私の経験から
於:東南アジア展示

10月13日(土)

朝倉 敏夫 (民族文化研究部教授)
「ハングルは最高イムニダ」
於:朝鮮半島の文化展示

10月14日(日)

齋藤 晃 (先端人類科学研究部准教授)
アマゾンの旅する
於:アメリカ展示

10月21日(日)

白川 千尋 (先端人類科学研究部准教授)
特別展「オセアニア大航海展」が
出来るまで
於:特別展

10月27日(土)★

特別企画
名誉教授のみんなく案内
藤井 龍彦
11:00~ 於:アメリカ展示
立川 武蔵
12:30~ 於:南アジア展示
清水 昭俊
13:45~ 於:オセアニア展示
加藤 九祚
15:00~ 於:中央・北アジア展示

■時間: 14:30~15:30(予定) ★10月8日、27日は時間の変更あり

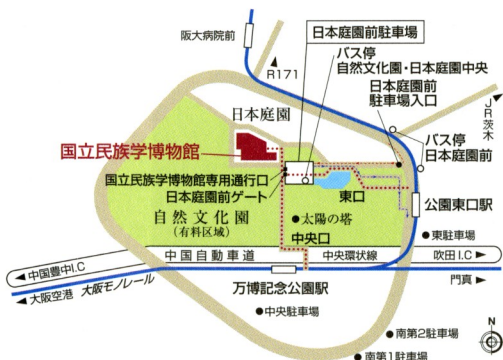
■参加費: 無料(ただし、常設展もしくは特別展観覧料が必要)

*毎週土曜日は、小学生・中学生・高校生は無料で観覧できます。ただし、自然文化園を
通行して来館される場合は、自然文化園の入園料が必要です。

編集後記

海外でのフィールドワークを経験した研究者にとって、不便とはいつても食事、睡眠とともにトイレが快適でさえあれば、何とか毎日やっていけるものだ。今回の特集のテーマはトイレであるが、おそらくフィールド研究者は、自身のさまざまな経験を思い出しながら読んだことと思う。

わたし自身も各地でさまざまなトイレを見てきた。なかでも忘れられないのは、中国青海省の農村での経験である。それは本文でも紹介された、ブタに後始末をさせるタイプのトイレであったが、いつもきれいに処置してくれている主人公の写真をとろうとして、泥水に寝そべる大きなブタにおそろおそろ近づいたときのことだ。突然泥のなかから頭をあげたブタは、大きな耳をぶるぶると振った。耳についた泥が飛びちり、一瞬行き先を見失ったが、ひんやりした感覚で、泥つぶでのひとつがわたしの頬を直撃したことに気がついた。顔面神経を硬直させたままあわててティッシュを探し、他の被害箇所を点検したのはいうまでもないが、目や口にはいらなかった幸運に感謝したものである。いつか、このようなフィールドでの失敗体験を特集してもおもしろいかもしれない。(庄司博史)



交通案内

- 大阪・千里万博記念公園内
- 大阪モノレールで「公園東口駅」・「万博記念公園駅」下車徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車徒歩約15分(茨木方面から1時間1本程度、日本庭園前駐車場乗り入れのバスがあります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください)。
- 自家用車の場合は、万博記念公園「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。



次号予告/11月号特集
特別対談

2007年 10月号

第31巻第10号通巻第361号
2007年10月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話06-6876-2151

発行人 朝倉敏夫

編集委員 池谷和信(編集長) 榎永真佐夫
久保正敏 庄司博史 山中由里子

協力 財団法人 千里文化財団

制作 株式会社博報堂

製版・印刷 アサヒ精版印刷株式会社

挿画提供・協力 5頁中 小川待子

- 本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館企画連携係へ
- 本誌掲載記事の無断転載を禁じます